

【論文】

日本における子ども博物館のはじまり
—チルドレンズ・ミュージアムを媒介にした国際交流—

The Birth of Children's Museums in Japan:
Fostering International Exchange through Children's Museum Activities

佐藤 優香※

Yuuka SATO

Abstract:

This paper presents the history of the Children's Museum of Buddhism, the first children's museum in Japan established in 1928, and its education programs offered in the early stage. The concept to create the Children's Museum of Buddhism was inspired by a project to exchange dolls between the United States and Japan. Jessie M. Sharwood, a Japanophile, believed in "the world friendship starts from children." She proposed her idea to exchange dolls between two countries to Gendo Nakai. From the donation collected by Nakai, Japanese Hina dolls were sent to the U.S and exhibited in New England area including Boston. In return, Sharwood send American dolls to Japan which were displayed in many locations in Japan. This project influenced the another friendship doll exchange program initiated by American Sidney Gulick and Japanese Viscount Eiichi Shibusawa in 1927. In this program, about 10,000 American Blue-eyed Dolls were sent to Japan. The Hina dolls were decided to keep at the Boston Children's Museum. In order to preserve and exhibit dolls sent from the U.S., the Children's Museum of Buddhism was established by the contribution from the Japanese public. Because of this cultural exchange, this newly found museum learned its management from the Boston Children's Museum. In addition, the Boston Children's Museum influenced in the other museum functions including a membership program called *Museum Friends* and education programs such as *Museum Games*. Furthermore, two institutions actively exchange various artifact including children's artwork. It is worth noting that the Children's Museum of Buddhism worked as the place for children to gather and learn together, the place for international exchange, and the place for mutual communication.

※ 国立歴史民俗博物館

1. はじめに

チルドレンズ・ミュージアムは、身近なできごとや環境をテーマにその意味や仕組みを体験を通して理解することができる子どもを対象とした博物館である。現在、その数は世界で300館を超え、日本の施設では篠山チルドレンズ・ミュージアム、霊山子どもの村遊びと学びのミュージアム、キッズプラザ大阪などがその一例としてあげられる。

最初のものは、アメリカのブルックリンで設立され、その歴史は1899年に遡ることができる。次いで設立されたボストン・チルドレンズ・ミュージアムは、1960-1970年代に館長を務めたマイケル・スポック (Michael Spock) 氏の取り組みによって、「やってみることで学ぶ learning by doing」という思想が、ハンズ・オン (hands-on) の手法によって広められた。日本においても、「ハンズ・オン」という言葉が、チルドレンズ・ミュージアムとともに広まり、今では一般の博物館も対象にした展示の手法や考え方を表す言葉として定着するほどになっている⁽¹⁾。先にあげた日本のチルドレンズ・ミュージアムは、いずれもが1990年代に入ってからの開館である。そのため、日本における「子どものための博物館」の歴史は近年始まったばかりかのようにとらえられがちだが、1928年には日本で最初の子どもの博物館が京都に設立されている。仏教児童博物館と名付けられたその施設は、ボストンのチルドレンズ・ミュージアムとも交流を行い、子どもを対象に活発な事業を行ってきた。

本論では、日本で最初の子どものための博物館である仏教児童博物館の設立の契機となった、シャーウッド (Jessie M. Sharwood) と中井玄道 (1878-1945) による日米親善人形交換事業の経緯、ボストン・チルドレンズ・ミュージアムとの交流から生まれた事業などに着目しながら設立の経緯と活動内容を明らかにする。また、1927 (昭和2) 年におよそ一万点贈られ「青い眼の人形」としてもてはやされたギュリック (Sidney Lewis Gulick, 1860-1945) と渋沢栄一 (1940-1931) による人形交換が、この事業とどのように関わっていたかにも注目する。ギュリックと渋沢による人形交換については先行研究も多く一般書などでとりあげられているが、そこにシャーウッドとの関係は言及されていない⁽²⁾。

交流をきっかけに市民からの寄付によって設立されたこの小さな博物館の理念と運営は、今日の博物館におけるコミュニケーションの問題に大きな示唆を与えてくれるだろう。

2. 日米親善人形交換事業

仏教児童博物館の設立は、シャーウッドの始めた日米親善人形交換事業に端を発する。ボストンに暮らすシャーウッドは裕福な英国移民の二世で、当時アメリカでさかんにおこっていた排日運動にたいして疑問をもち、ボストン日本協会を組織して10年間無給で書記を務めながら協会の中心人物として活動をおこなってきた。自宅を「ジャパニーズ・ホーム」と称して日本人留学生に開放したり、関東大震災で学資の送金が途絶えた者のために寄付をつのったりもした⁽³⁾。

シャーウッドは、「国際親善は子どもから」という考えをもっており、雛人形寄贈を依頼する前年に、アメリカの子どもの絵画や文章を1千点集めて日本の文部省に送っていた。しかし、この

事業が文部省でどのように扱われたかは不明であり、シャーウッドに対しての返答はなかった。そこで、もっと容易で有効な方法はないかとの考えから、日本からの雛人形寄贈を求めたのである(親鸞主義4)。シャーウッドは、その手だてについて、渡米中の日本人商社員や、ボストン日本協会の名誉副会長で、そのころ京都に在住していた仏教学者のエリザベス・アンナ・ゴルドンに相談したところ、中井玄道を紹介されるに至った。

中井玄道は、1878(明治11)年、大阪の正福寺に生まれた。仏教の開教使として、1902(明治35)年、アメリカに渡り、現在のシアトル別院の基礎を築いた。1907(明治40)年、眼疾のため帰国し、1920(大正9)年より1929(昭和4)年まで龍谷大学で教授として真宗学を講じた。彼も発行に関わっていた雑誌『親鸞主義』や宗教新聞『中外日報』などに多くの論説を残しており、そこには仏教児童博物館に関する論考や記事も多くみられる⁽⁴⁾。1945(昭和20)年7月に没するまでには、『教行信証』の校訂のほか、英文による著書も著した⁽⁵⁾。

シャーウッドの著した論説やシャーウッドに関する記事は以前より『親鸞主義』に掲載されており⁽⁶⁾、中井をはじめとする京都在住の仏教関係者には「ボストンの親日家シャーウッド女史」の名はすでに知られていた。シャーウッドが1925(大正14)年4月29日付で送った書簡は「日本仏教徒諸氏の援助を求むる書」と題して『中外日報』と『親鸞主義』に掲載された(中外日報1、親鸞主義2)⁽⁷⁾。

今回差し上げます手紙は、特にお願い申して御援助を仰ぎたいことに就てであります。日本の仏教徒諸君は、三月三日に祝すべき雛祭のあらゆる材料を蒐集して、之を寄贈する御厚意がお有りでありますまいか……三月三日は雛祭の日であります。若し材料一式を今秋に手に入れることが出来れば、その日か或はその前後に雛祭を催したいと思っています(出来るならば日本協会の主催にて)……雛祭に来る様にボストンの小学校生徒に案内状を出したいのです。これは新しい試みですから、一般に知れ亘るでせう。新聞も雛祭りの話で充たされるでせう……ニューイングランド州内及び附近の教会は、いつもの例によって、雛祭の材料を借りたいと申込むでせう。斯の如くして材料は展伝と旅をして行くでせう。そうすると私は、各地の日本協会へ同様の展覧会を開く様に勧めようと思ひます。この勧誘は必ず歓迎されませう。あらゆる方法で役立たせた上は当地の美術館に永久に保管をして貰はうと思ひます……人形が集って一度それを展覧せしめたならば、公衆は重要な教育効果のあることを認めるであらうと思ひます。そしてこれが日米関係を善くする一助となるべきことを信じて疑ひませぬ

この手紙をうけとった中井は、親しくしていた中外日報社長の真溪涙骨(1869-1956)や京都女子専門学校長の朝倉暁瑞に協力を求め、『中外日報』と『親鸞主義』紙上を通じて雛人形購入資金の寄付を募ることにした(中外日報1、親鸞主義2)。両紙は、これ以外にも関連記事を掲載し、雛人形を贈ることやシャーウッドの日米親善活動への理解の促進に努めた。その結果840円50銭の寄付が集まった(親鸞主義7)⁽⁸⁾。

雛人形は、「親王官女随五人囃子仕丁等と付属品」、「能楽羽衣と現代婦人」、「鯉幟り」も添え

〈表1〉『親鸞主義』仏教児童博物館関連記事

番号	記事タイトル	号	年月日	筆者
1	ボストンの日本協会の超宗派的日米親善運動	45	1924/1/1	南出生
2	ボストン日本教会秘書シャーウッド女史より	56	1924/12/1	
3	日本仏教徒諸氏の援助を求むる書	62	1925/6/1	シャーウッド
4	シャーウッド女子の来簡	64	1925/8/1	
5	米国シャーウッド女史より	66	1925/10/1	
6	シャーウッド女史の事ども	67	1925/11/1	南出生
7	編輯後記	68	1925/12/1	
8	米国シャーウッド女史より	70	1926/1/1	
9	ボストンに於ける雑祭	74	1926/6/1	中井玄道
10	その後の雛人形	86	1927/5/1	中井玄道
11	訪日人形の発意者とスポンサー	87	1927/7/1	南出生
12	誌友より	92	1927/12/1	
13	仏教児童博物館の設立を提議す	94	1928/2/1	中井玄道
14	再び仏教児童博物館に就きて	96	1928/4/1	中井玄道
15	仏教児童博物館の設立	97	1928/5/1	中井玄道
16	仏教児童博物館へ寄す	98	1928/6/1	
17	土俗玩具募集	99	1928/7/1	
18	米国より来れる答礼の人形使節(上)	101	1928/9/1	中井玄道
19	米国より来れる答礼の人形使節(下)	102	1928/10/1	中井玄道
20	シャーウッド女史におくる	103	1928/11/1	中井加寿子
21	THE BUDDHIST MUSEUM FOR CHILDREN	104	1928/12/1	中井玄道
22	ボストンより	104	1928/12/1	
23	児童文化展覧会 広告	104	1928/12/1	
24	THE BUDDHIST MUSEUM FOR CHILDREN	105	1929/1/1	中井玄道
25	児童文化展覧会の記	105	1929/1/1	中井玄道
26	仏教児童博物館 寄付依頼	112	1929/8/1	
27	宗教大博覧会 広告	119	1930/3/1	
28	外国だより	120	1930/4/1	
29	仏教児童博物館資料一部展観 広告	120	1930/4/1	
30	誌友より	123	1930/7/1	
31	ヨハネ人形	125	1930/9/1	大友抱瑛
32	誌友より	125	1930/9/1	
33	全仏教徒の援助を乞う	126	1930/10/1	
34	誌友より	127	1930/11/1	
35	教育資料展覧会 広告	127	1930/11/1	
36	誌友より	128	1930/12/1	
37	ボストンの想出から(上)	130	1931/2/1	白井成允
38	ボストンの想出から(中)	131	1931/3/1	白井成允
39	ボストンの想出から(下)	132	1931/4/1	白井成允
40	日独児童の絵画	133	1931/5/1	
41	仏教児童博物館 開館告知	135	1931/7/1	
42	仏教児童博物館 寄付依頼	138	1931/10/1	
43	児童博物館の施設状況	147	1932/7/1	中井玄道
44	満州国少女使節歓迎の記	148	1932/7/1	
15	欧米人の社会性 一博物館その他の文化運動一	150	1932/10/1	
16	寺院の新しき教育施設	170	1934/6/1	

上掲以外に、100以降の毎号に『仏教児童博物館記事』として活動や寄贈の内容が報告されている

〈表2〉『中外日報』仏教児童博物館関連記事

番号	記事タイトル	号	年月日	筆者
1	日本仏教徒諸氏の援助を求むる書	7722	1925/6/7	
2	雛祭り材料購入費募集	7731	1925/6/18	
3	排日のハースト系の記者を改悔せしめたシャーウッド女史	7798	1925/9/6	
4	雛人形の其の後	7796	1925/9/4	
5	排日のハースト系の記者を改悔せしめたシャーウッド女史	7798	1925/9/6	
6	愈出来上った米国行雛人形	7808	1925/9/18	
7	雛人形の寄贈	7816	1925/9/29	
8	日本仏教徒に『雛人形』を要望したシャーウッド女史とはドンナ人?	7818	1925/10/1	
9	国民から国民への贈物として米国で雛祭の展観をするといふシャーウッド女史の書信	7882	1925/12/18	
10	本社及び本誌の読者に対するシ女史よりの感謝状	7838	1925/10/25	
11	雛人形の積込	7842	1925/10/30	
12	国民から国民への贈物として米国で雛祭の展観をするというシャーウッド女史の書信	7882	1925/12/18	
13	日本仏教徒から米国への贈物雛人形ポストンに着く目下展覧会の準備中	7920	1926/2/5	
14	京都高女生の絵をポストンに贈る	7921	1926/2/6	
15	ギュリック博士から雛人形借用を申し込む	7938	1926/2/27	
16	賑かにもようさるポストンの雛祭り	7986	1926/4/25	
17	ポストン市民を熱せしめた雛祭りの景況	7996	1926/5/7	
18	ヤング・イーストに出る米国雛まつり讃嘆	7998	1926/5/9	
19	ポストンにて引張風の雛人形	8004	1926/5/16	
20	ポストン市民を熱せしめた雛祭りの景況	7996	1926/5/17	
21	日米人形の交驩	8065	1926/7/27	
22	米国より各地からやって来た人形は無邪か有邪か	8226	1927/2/13	宇津木二秀
23	青い眼の人形 米国流か基督教流か 礼を知らぬ?	8241	1927/3/3	
24	雛人形	8267	1927/4/3	
25	平和の使命を果たしつつ東奔西走の雛人形(上)シャーウッド女史からの報告	8288	1927/4/28	
26	挨拶を忘れた雛人形(上)	8299	1927/5/12	谷村武雄
27	挨拶を忘れた雛人形(下)	8302	1927/5/15	谷村武雄
28	日本から贈った雛人形の答礼の人形が近く来る	8310	1927/5/25	中井玄道
29	訪日人形に就て	8311	1927/5/26	弓削香村
30	市小学校長会とアメリカ人形	8360	1927/7/22	
31	訪米雛人形問題に就て(一)シャウッド女子を訪ふ	8372	1927/8/5	弓削香村
32	訪米雛人形問題に就て(二)シャウッド女子を訪ふ	8373	1927/8/6	弓削香村
33	訪米雛人形問題に就て(三)シャウッド女子を訪ふ	8374	1927/8/7	弓削香村
34	訪米雛人形問題に就て(四)シャウッド女子を訪ふ	8375	1927/8/9	弓削香村
35	訪米雛人形問題に就て(五)シャウッド女子を訪ふ	8377	1927/8/11	弓削香村
36	児童博物館の建設	8382	1927/8/17	
37	人形が出来たそうな 一その官僚臭を惜む一	8397	1927/9/3	
38	小学女児から贈る米国人形	8398	1927/9/4	
39	シャーウッド女史の寄贈人形展覧会	8455	1927/11/13	
40	京都に児童博物館が出来たら 一日米児童の親善を一	8472	1927/12/4	
41	小学校教育の補助機関としての児童博物館(一)	8508	1928/1/21	シャーウッド
42	小学校教育の補助機関としての児童博物館(二)	8509	1928.1??	シャーウッド
43	小学校教育の補助機関としての児童博物館(三)	8510	1928/1/25	シャーウッド
44	小学校教育の補助機関としての児童博物館(四)	8512	1928/1/26	シャーウッド
45	小学校教育の補助機関としての児童博物館(五)	8515	1928/1/29	シャーウッド
46	小学校教育の補助機関としての児童博物館(六)	8518	1928/2/2	シャーウッド

番号	記事タイトル	号	年月日	筆者
47	シ女子の熱心に動かされた中井教授	8519	1928/2/3	
48	小学校教育の補助機関としての児童博物館(七)	8521	1928/2/5	シャーウッド
49	小学校教育の補助機関としての児童博物館(八)	8514	1928/2/9	シャーウッド
50	計画されつつある仏教児童博物館(上)	8528	1928/2/15	
51	計画されつつある仏教児童博物館(下)	8529	1928/2/16	
52	児童の為の博物館(上)	8529	1928/2/16	チャーレス・ドーグラス
53	児童の為の博物館(中)	8533	1928/2/20	チャーレス・ドーグラス
54	児童の為の博物館(下)	8529	1928/2/16	チャーレス・ドーグラス
55	日本最初の児童博物館にボストン児童博物館から小博物館指南書寄贈	8550	1928/2/11	
56	京都に児童博物館の出現を望んで—シ女史の大熱心	8552	1928/3/14	
57	アメリカから来る素晴らしいお人形	8556	1928/3/18	
58	仏教児童博物館発起人集会	8556	1928/3/18	
59	児童博物館	8557	1928/3/20	
60	仏教児童博物館規則 創立委員の草案成る	8572	1928/4/8	
61	軍艦で渡来させたいアメリカ人形	8572	1928/4/8	
62	鑑賞家達が賞讃したジョルダン百貨店に於るアメリカ人形展覧会	8573	1928/4/10	
63	児童博物館	8584	1928/4/22	
64	ジョルダ、マアシュ店の遣日人形の展覧	8584	1928/4/22	
65	日本最初の児童博物館にボストン児童博物館のマンター館長の祝辞	8590	1928/4/29	
66	児童博物館が各所に松茸のように多くできてはと —米国から心配	8605	1928/5/17	
67	仏教学術聯盟は再議 児童博物館は参加する京都仏教各宗学校聯合会	8615	1928/5/29	
68	仏教児童博物館の資料収集の応援	8617	1928/5/31	
69	米国人形の桑港出帆	8634	1928/6/20	
70	人形のボストン出発	8644	1928/7/1	
71	米国人形の数々	8644	1928/7/1	
72	児童博物館 知恩院で展観	8649	1928/7/7	
73	アメリカの児童達から「日本への便り」 —児童博物館について—	8662	1928/7/22	
74	雛人形に代りてボストンから日本に送る手紙	8668	1928/7/29	アレキサンダー嬢
75	米国より来れる答礼人形施設(一)	8688	1928/8/22	中井玄道
76	米国より来れる答礼人形施設(二)	8689	1928/8/23	中井玄道
77	米国より来れる答礼人形施設(三)	8691	1928/8/25	中井玄道
78	米国より来れる答礼人形施設(四)	8692	1928/8/26	中井玄道
79	米国より来れる答礼人形施設(五)	8693	1928/8/28	中井玄道
80	米国より来れる答礼人形施設(六)	8694	1928/8/29	中井玄道
81	米国人形の歓迎会	8724	1928/10/3	
82	来る十四日に開かれる米国人形歓迎会	8730	1928/10/10	
83	快き日米親和の合奏アメリカ人形の歓迎	8735	1928/10/16	
84	日本の児童博物館の事を唾者に話す興味	8736	1928/10/17	シャーウッド
85	全国仏教徒大会と児童博物館の催し	8748	1928/11/1	
86	バタビア博物館長から仏教児童博物館へ寄贈	8775	1928/12/6	
87	展覧会広告	8783	1928/12/15	
88	展覧会広告	8785	1928/12/18	
89	素晴らしい人足をひく児童文化展覧会	8786	1928/12/19	
90	展覧会広告	8786	1928/12/19	

番号	記事タイトル	号	年月日	筆者
91	信仰、玩具、芸術 児童文化展覧会に際して(上)	8786	1928/12/19	福山順一
92	信仰、玩具、芸術 児童文化展覧会に際して(中)	8787	1928/12/20	福山順一
93	信仰、玩具、芸術 児童文化展覧会に際して(下)			福山順一
94	児童博物館の大阪展観	8826	1929/29/10	
95	排日の中心地羅府の児童から児童博物館へ	8831	1929/2/17	
96	児童博物館資料の小学校貸出実現	8849	1929/3/10	
97	仮建築を決議した仏教児童博物館総会	8862	1929/3/27	
98	仏教児童博物館の昭和三年度事業報告	8862	1929/3/27	
99	三重県小山田村に児童博物館展	8876	1929/4/13	
100	印度に日本学童の作品を児童博物館の手で贈る	8894	1929/5/5	
101	仏教児童博物館が日独児童の親善を計る	9031	1929/10/15	
102	ボストンの想出から(一)	9396	1931/1/6	白井成允
103	ボストンの想出から(二)	9397	1909/4/15	白井成允
104	ボストンの想出から(三)	9398	1931/1/8	白井成允
105	ボストンの想出から(四)	9399	1931/1/9	白井成允
106	児童博物館より	9399	1931/1/9	
107	ボストンの想出から(五)	9400	1931/1/10	白井成允
108	ボストンの想出から(六)	9401	1931/1/11	白井成允
109	児童博物館の日独親善 独逸児童より図書寄贈	9460	1931/3/16	
110	絵画の上に現はれた日独児童の性能	9477	1931/4/5	
111	法人組織など条件付きで仏教児童博物館公園使用許可され七月開館	9527	1931/5/29	
112	仏教児童博物館が得た常設陳列館の内容	9528	1931/5/31	
113	菊溪クラブから仏教児童博物館へ	9568	1931/7/14	
114	風俗資料として有意義な結納の包紙装飾を外国に紹介した児童博物館	9593	1931/8/12	
115	是からが一骨の児童博物館	9571	1931/7/17	
116	児童博物館の今後	9641	1931/10/8	
117	児童博物館と小学校	9696	1931/12/15	
118	仏教児童博物館だより	9717	1932/1/14	
119	シャーウッド女史を賑した X マスカードの新趣向	9718	1932/1/15	
120	「こどもタイムス」を発行	9722	1932/1/20	
121	子供の博物館を拝見して(上)	9735	1932/2/4	田村克己
122	子供の博物館を拝見して(下)	9738	1932/2/7	田村克己
123	児童博物館で使節招待	9863	1932/7/7	
124	児童博物館の一周年	9940	1932/10/6	
125	児童博物館の新容	10060	1933/3/5	
126	丸山の児童博物館で新興青座談会	10083	1933/4/2	
127	児童博物館の書画展と各宗招待	10105		
128	母と子のための教育的施設(上)	10407	1934/5/3	中井玄道
129	母と子のための教育的施設(下)	10408	1934/5/4	中井玄道

られた立派な一揃いであった(中外日報6)⁹⁾。完成した雛人形は、9月23日彼岸の休暇を利用して、京都女子専門学校(現、京都女子大学)の講堂において展覧されることになった。その際、女子仏教青年会の主催で盛大な送別会が催され、およそ500人が集まった。そこでは、中井による挨拶をはじめ、青年会の代表者が演説をし、京都幼稚園の園児によって、野口雨情作詞の「青い眼のお人形」と青年会が創作した「黒い眼のお人形」の歌と遊戯が披露されたりもした。

3. アメリカに渡った雛人形

シャーウッドの発案と中井の尽力によって準備された雛人形は、1925（大正14）年10月31日に神戸港を出帆し、シアトルを経て翌1926（大正15）年1月、ボストンに着いた。それにあわせて、中井は日本の小学生の絵画70余点、京都高等女学校の生徒の絵画30点、京都女子専門学校の学生が書いた雛祭りや五月の節句についての叙事文、9月におこなった送別会での代表者による演説の英訳や『中外日報』の関連記事とその英訳を、シャーウッドに宛てて送った（中外日報13）。これは、シャーウッドからの「児童の文章を送って頂きたいとお願いしましたが、今一つ展覽場を賑はす為に児童の描ける絵画を送って頂きたいものです。雛人形を京都高等女学校で陳列された当時の模様を承はって、大変興味を感じました。その節の女学生の演説や幼稚園児の童謡を翻訳して送って下されば、何よりの好材料です」との依頼をうけてのことであった（中外日報9、14）。

こうして日本から雛人形や絵画作品などを受けとったボストン日本協会は、婦人労働者団体の協力を得て、1926（大正15）年4月3日からおよそ2週間、ボイルストン街にあるバーキンス・ホールにて雛人形の展覧会を開催した。毎日午後には市内小学校を、夜にはロータリークラブ、教師クラブ、婦人クラブ、日本協会、私立学校協会などの団体を招待した（中外日報17）。

会場には、返礼の米国人形を贈る資金を集めるための義金箱が設けられた。その年の干支である寅の絵が描かれ、十二支の説明やこの企画のいきさつ、雛祭りと端午の節句の解説、送別会での演説文や「黒い眼をしたお人形」の歌詞が載せられた「日本の児童生活」と題した8頁の冊子が来場者に配布された。毎日午後におこなわれた小学生の見学には、少年赤十字の児童が会場整理をおこない、身体の不自由な人には赤十字社の病人用自動車で送迎をした（親鸞主義7）。また、1日2回、日本人学生による雛人形についての解説を実施するなど、展示以外にも日本文化についての理解をたすける工夫がなされていた。

展覧会の模様は、『ボストン・トランスクリプト』、『クリスチャン・サイエンス・モニター』、『ポスト』、『ヘラルド』、『イブニング・アメリカン』の各紙や『ボストン教師通信』などに掲載されたという（中外日報18、親鸞主義7）。それぞれ大きく紙面をさき写真も載せていたとのことである。特に「ボストン・トランスクリプト」は3月27日から31日まで、その予告記事として人形が贈られた事情や、雛祭りの歴史、日本での送別会の様子や演説の全文を紹介したとシャーウッドは中井に知らせている。

ボストンでの公開の後、4月17日からはケンブリッジでも2週間公開され、ついでメルローズに渡った（中外日報19）。雛人形の貸し出し希望はアメリカ全土から多数寄せられ、スプリングフィールド（1926年12月）→エール大学博物館（1927年1月）→プロビデンス（2月）→ニュージャージー州ニューアーク（3月）→クリーブランド（4～5月）→シカゴ（夏）→バッファロー（夏）とまわったことがわかっている（中外日報25、親鸞主義10）⁽¹⁰⁾。また、その後もっとも排日運動がさかんであったカリフォルニア州内でも公開が予定されていたようである。

巡回展覧会を終えた後の雛人形の保存場所としては多くの申し出があり、その中でもボストン

のチルドレンズ・ミュージアムとワシントン少年赤十字本部が最終的な候補としてあがっていた。シャーウッドがこの2つの施設を適当であると考えていた理由は、ボストンのチルドレンズ・ミュージアムならば、自ら赴き展示や貸し出しの世話をすることもできるし、時には雛人形を鑑賞することもできて便利であること、ワシントン少年赤十字本部についてはボストンの雛人形公開に多大な後援をしてくれたし、これからの利用についてもいろいろ考えてくれている様子だからとのことであった（中外日報 19）。そこで、中井に宛てて寄贈者側の意見を求めた。それにたいして中井は、「日本から雛人形を贈ったのは一に少女史の日米親善運動の労苦を慰し其の事業の一助ともなるべき様にといふ意味であったから、少女史がその愛し親しめる雛人形を遠いワシントンに持ち出された時には淋しさに襲はれる事もあらうと考へられるので、特にボストンに止められる様に希望する」と返答した（中外日報 19）。こうして雛人形一揃いは、アメリカ・ニューイングランド地方を巡回した後、ボストンのチルドレンズ・ミュージアムで保存、公開されることになった。

4. アメリカからの返礼人形

ボストンで展覧会がおこなわれていた1926（大正15）年4月、シャーウッドは返礼としてアメリカの人形を日本に送る準備に着手していた。そのことは『親鸞主義』の中井の記事の中で「返礼の意味で、米国の少年少女より日本の児童への贈物として、人形玩具などを有志者より募集して、来春までには届ける計画がある相である」（親鸞主義 9）と紹介され、『中外日報』では「米国製の人形を日本に贈ることはもはや発送の準備にかかっているがギュリック博士はいろいろ奔走してられる」（中外日報 16）と報じられた。しかし、このことは後にシャーウッドへの雛人形寄贈を知る人たちの誤解をよび、『中外日報』紙上に疑問の声があがることとなった。

4-1. ギュリックから贈られた「青い眼の人形」

中井たちが贈った雛人形がアメリカに届いてから1年後の1927（昭和2）年冬、アメリカの基督教総合会の秘書であるギュリックが主唱して、渋沢栄一が会長を務めた「日米国際児童親善会」を受け入れ団体として日本の子どもに対してアメリカ製人形が贈られてきた（是澤 1999）。人形の数は一萬点にのぼり、日本では全国の小学校や幼稚園に配られることとなった。この贈り物について、シャーウッドのことやそれが日本からの雛人形の返礼であることはどこにも記されていない。

人形を介した日米親善の灯をともしたのはシャーウッドでありその事業を担ってきたのは中井や『中外日報』であることを周知していた人々にとって、シャーウッドが無視されているのは納得のできないことであった。そして、これに関する記事が『中外日報』紙上を賑わすこととなった。ギュリックからの人形が届くことが他紙で予告されると早速「愉快に堪へぬ事は日米の童心を相結ぶの企てが既に昨年吾中外日報社の手によって、日本仏教徒の名の下に雛人形をボストンに贈ったこと、而してその雛人形がボストンを振り出しに米国の都市に於て米国児童に親しみつつある事である……暫く他の事例を措いてギュリック博士を刺戟したであらうところの雛人

形の米国行きについて吾人の欣快を読者と共に頒たんと思ふが敢て読者の注意を求めるのである」との記事がでた（中外日報 21）。人形が届いてからの記事や論説は、「米国各地からやって来た人形は無邪か有邪か」（中外日報 22）、「—青い眼の人形— 米国流か其教流か —礼を知らぬ?—」（中外日報 23）、「雛人形」（中外日報 24）、「挨拶を忘れた雛人形」（中外日報 28）、「Real Sponsor of American Doll Mission」（*The Young East*）などである。いずれにも共通する内容は、日本仏教徒の名において送った雛人形が、ボストンをはじめとするアメリカ各地を巡回したことがニューヨークに影響を与えなかったとは考えられず、シャーウッドとニューヨークの間になんらかのやりとりがあったと聞いているのに、なぜ言及されていないのかというものである。

このうちのひとつである *The Young East* の記事を読んだシャーウッドは、『ヤング・イースト』に、私が訪日人形の真のスポンサーであるといふ記事を見ましたが、私はかかる記事の出たのを遺憾とします。私を訪日人形のスポンサーであるといふのは断じて正しくありません。尤も私は日本に人形を送ることの発意をしましたが、実際訪日人形のスポンサーとなったのはニューヨーク博士です」（親鸞主義 11）との返信を送ってきた。

実際、ニューヨークは、雛人形がボストンについて間もない 1926 年（大正 15）年 1 月末、シャーウッドに雛人形の借用を申し込んでいた。シャーウッドから中井に 2 月 1 日付で送られた書簡によると、日本から雛人形をもらったので今度はアメリカの人形を日本に贈る計画をたて、その計画を推進するために雛人形を各地で公開したいということからであった。シャーウッドは、雛人形を貸すことは承諾するが、最終的にはボストンの博物館で長く保存したいので破損や損失に対する保証をしてもらいたい旨の返答をした。しかし、雛人形引き渡しの日時や場所まで決めていたのにもかかわらず、その約束は果たされぬものとなったという（中外日報 28）。

ニューヨークが送った人形とシャーウッドの関係はいかなるものであったのだろうか。中外日報社は事の真相を明かそうと、ケンブリッジに在住しておりその紙面にもたびたび寄稿していた弓削香村に、直接シャーウッドと会見することを依頼した。弓削の質問にシャーウッドは「ニューヨークさんの人形はあれはあの人のキモ入りで全米の教会の努力に依って日本に行ったものです。恰度日本の人形がやって来た時私は日本へ答礼の人形を送ることを当時あの会の会長であった博士の令弟へ話しました。するとそれを博士がきかれて、あの訪日人形の企てが始まったのです。ですから勿論私の考えが土台にはなっているが、返礼の意味ではありません」とこたえた。さらに弓削は、ニューヨークとの間に誤解はなかったのかと問うたが彼女はなないとこたえている。そして、彼女自身返礼の人形を用意していることを告げた（中外日報 32）。

ニューヨークが人形寄贈について駐米日本大使を訪ねたのは、1926（大正 15）年 2 月 4 日のことである。この際、ニューヨークは、輸入関税の免除と人形を配布することへの協力依頼を申し出た。ニューヨークがシャーウッドを訪ねたのは 1 月 19 日なので、彼がシャーウッドの企画に刺激されて即座に行動をおこしたことが予測される。そして彼は、日本政府からの了解を早く得られるよう駐米大使に催促を繰り返していた。ニューヨークは、日系移民排斥問題では日本側に好意的な立場をとり、「移民法」阻止をめざしていた。しかし、そのかいなく「移民法」は成立し、

ギューリックは同法の改正運動を展開するがこれも排日派の選挙戦略に利用されて親日家や日本政府関係者、在米移民から多くの非難をうけることになってしまった。このような立場にあったギューリックが、子どもを対象とした親日活動に惹かれたのは想像に難くない。

4-2. シャーウッドから贈られた「アメリカ風俗人形」

ギューリックの問題が日本でもちあがっていたころ、シャーウッドは「返礼人形としてアメリカ建国以来の歴史を語るものでその人形を見たら一見して米国文化史の縮図をまのあたりに見ることができるものを考えている」（中外日報 32）という手紙を中井に宛てている。返礼人形を日本に送る方法についての相談をもちかけており、関税をかけないすべとして、日本にもボストンと同様にチルドレンズ・ミュージアムを設立し博物館から博物館への資料寄贈というかたちで免税にしてもらうのはどうかとの案を出している。これがシャーウッドから中井にたいしての、日本において子どものための博物館設立をうながす最初の提案であった。前述したようにギューリック問題の真相を確かめるべくシャーウッドを訪ねた弓削は、完成途中だったアメリカ風俗人形の一部を見せてもらい、返礼人形に対するシャーウッドの情熱に直接ふれることになった。誰に宛てて送るのかとの問いに「勿論、中井さん宛ですよ。私はあの人を通し、中外日報の援助あの人形を送って貰ったのですから、矢張中井さん宛に送ります」と返答したという（中外日報 33）。弓削が見た人形は、二大偉人（ワシントン、リンカーン）、百姓、黒人農夫、ガールスカウトの4種類だけであったが「其の芸術的価値は実に立派なものであって決して単に小売店の売品ではないのである」との感想を述べている（中外日報 32）。

返礼人形のなかでも特に、アメリカ風俗人形はシャーウッドが雛人形になぞらえてつくらせたもので、当時の価格で1体が250ドルを超える高価なものもいくつかあふまれていたという。中井は『中外日報』紙上において、1体1体についてその人形がどのような意味を持つのかということや詳細な外観の描写や製作者の紹介を書いている（中外日報 75-80）。

日本では、シャーウッドの提案を受け、仏教児童博物館設立の計画が進んでいた。日本からアメリカへ雛人形が贈られたときと同様に、アメリカでも人形の展覧と送別の会を企画していた。それは、1928（昭和3）年3月5日から月末まで、ボストンの百貨店ジョーダンマーシュ（Jordan Marsh）において開催された。展覧会は貿易品としての美術製品を集めた大規模なもので、人形の展示はその一部であった。日本から送られた雛人形とアメリカからの返礼の風俗人形は百貨店の別館二階おもちゃ売場にならべて展示された。会場では、「Japanese Dolls」と題した日米人形交換についての小さな三つ折りの冊子が配られた。シャーウッドは開催中の毎土曜日に会場にいて雛祭りや人形交換について演説もおこなった（中外日報 62、64）⁽¹¹⁾。華々しい送別をうけた返礼人形は、同年6月16日ボストンを出発した。横須賀を経て京都には7月26日に着いた（中外日報 69、71）。

アメリカ返礼人形の歓迎会は、女子仏教青年会を中心として1928（昭和3）年10月14日から、京都女子専門学校の講堂において開催された（中外日報 81）。仏教児童博物館の理事を務める中井の挨拶のほかアメリカ人形が持参したメッセージの朗読もあり、送別会と同様に京都幼稚園の

園児による「青い眼のお人形」「黒い眼のお人形」の歌と遊戯が披露された（中外日報 83）。これには 600 名以上の来場があった。次に、大谷派保育大会に際して、京都女子専門学校同窓会館ホールに展示された（中外日報 85）。仏教児童博物館は、その半年前の 4 月 18 日に設立されていたが、いまだ建物をもたず龍谷大学図書館の一室を事務室としていた。そのため返礼人形の一般公開は、京都大丸呉服店（現、大丸百貨店）で 12 月 15 日から 21 日までの 1 週間おこなわれた。「児童文化展覧会」と名付けられ、仏教児童博物館が主催し、アメリカ風俗人形だけでなくほかにも多くの資料が展示された⁽¹²⁾。翌 4 月 20 日からは大阪の白木屋でも展覧会がひらかれ、アメリカに渡った雛人形と同じく、この日米親善人形は日本各地を巡回することとなった（中外日報 94）。

5. 仏教児童博物館の設立

仏教児童博物館の設立を提案する記事が最初に出たのは、1927（昭和 2）年 8 月 17 日の『中外日報』においてである。ここでは、中井が「児童博物館の建設」と題して、小学校の校長らへ向け、米国から送られた人形の住処として博物館を建設するよう提案している（中外日報 36）。中井はやがては協会を立ち上げ仏教児童博物館の館長となるのだが、この記事には「文部省がやってくれなきゃ吾京都小の小学校長会で京都に小さい博物館を設けてくれても結構である」と記されており、この時点では自分で設立し、経営することを計画していたわけではなかったようだ。

より具体的に設立を提案しているのが、1928（昭和 3）年 2 月の『親鸞主義』に掲載された中井の「仏教児童博物館の設立を提議す」という一文である（親鸞主義 13）。米国には各地に子どものための博物館があること、子どものための博物館は一般の博物館とは異なったタイプの博物館であること、様々な教育的サービスが用意されていることなどを紹介しつつ、日本での実現の可能性を以下のように説いている。

児童博物館は米国に於て近年大に発達せるもので、小学校教育の補助機関として大なる効果を挙げつつある。これはその名の示す如く児童の為の博物館であつて、単に児童の興味のためのみならず、實際的の知識を与へ児童の研究心を指導するために、あらゆる方面の資料を蒐集陳列せるもので、小学校からは級全体が教師に引率せられて博物館に来て、館員の実物教授を受け、また博物館に来る定員が同趣味の者相集まりて倶楽部を作り、その目的に従つてそれぞれ館員の指導を受けるのであつて、普通の博物館の如く、勝手に入場して品物を見て廻るのとは類を事にしてゐる。また児童博物館では、毎週日を定めて種々の題目につきての講演がある。その聴衆を奨励する為に精勤賞を与えたり、陳列品に添へたる札に問題を幾つも書いて、之に答へた優良者に点数を与へる等のこともある。我が国には、未だこの種の児童博物館が存せない……米国に初めて児童博物館の出来たときは極めて小規模であつて、僅かに数個の標本から出発して^{アマ}特志家の寄贈品によりて、漸次に大きくなつて行つたと同様の道行きを取るならば、仏教児童博物館の実現は決して困難なことではない

中井は仏教家であり、仏教寺院で開かれている日曜学校の補助機関としての博物館として提案し、また昭和天皇の即位に記念した事業として行ってはどうか、ということを前面に出している。

この記事をうけて、賛同者があらわれたことにより、中井は自分が中心となって本格的に仏教児童博物館の設立に取り組むことにしたようだ。実際に設立されるまでの経緯は『中外日報』紙上で詳細に報告された。まず、先の『親鸞主義』の論説が出た直後2月15、16日の2日に渡り「計画されつつある仏教児童博物館」という記事が掲載されている。中井が執筆者となって子どものための博物館設立を提案する場合は、先にも述べたように、昭和の御大礼や仏教教育への貢献が第一義に表現されているが、中井を取材した記事ではシャーウッドが博物館の設立や運営を支援すべく、書籍をはじめとする数々の資料を送ったり、米国の博物館関係者に協力を要請したりしているとのことが紹介されており、やはり、中井がシャーウッドの熱心さに動かされということが、設立を大きく支えていたと考えられる（中外日報47、56）。

1928年3月17日に、仏教児童博物館発起人集会在京都女專の同窓開館にて開かれた。設立趣書⁽¹³⁾には発起人として106名の名前が記されており、『親鸞主義』(96)や『中外日報』(58)の記事には百余名の出席者があったと報告されていることから、発起人としてあげられた人々がこの集会の出席者であったと思われる。この日は、理事、評議員、学芸委員を選出し、創立のための事務を進めることと、以下4つの事業を行うことが承認された（親鸞主義14）。

- (1) 当分巡回式博物館として学校寺院会館等を巡回して展覽する。
- (2) 小学校日曜学校等の教課に従つて必要なる資料を組合せ、希望に応じて之を貸出する。
- (3) 蒐集品を応用し、兼ねて幻燈や活動写真をも使ふて児童の為に講演会を開く。
- (4) 外国の児童博物館と蒐集品を交換して児童の国際的親善を計る。

2回目の会合は、4月18日に開かれ、このときに規則が定められた。

第一条 本館ハ仏教児童博物館ト称ス。

第二条 本館ハ主トシテ仏教ニ関スル教育資料ヲ蒐集シ、児童ヲシテ仏教ノ思想歴史及ビ其ノ文化ヲ理解セシムルヲ目的トス。

第三条 本館ハ大凡左記ノ事業ヲ行フ。

- (一) 学校寺院会館等ニ於テ巡回展览会ヲ行フコト。
- (二) 小学校日曜学校等ノ希望ニ応ジテ資料ノ貸出ヲナスコト。
- (三) 資料ヲ応用シテ随時児童ノ為ニ講話会ヲ開クコト。
- (四) 児童ノ作品ヲ展観スルコト。
- (五) 外国ノ児童博物館ト教育資料ヲ交換シテ児童ノ国際的親善ヲ計ルコト。

第四条 本館ノ経費ハ館友ノ預金及ビ寄付金ヲ以テ之ニ充ツ。

第五条 本館ノ趣意ヲ賛成スル者ヲ館友トナシ、之ヲ維持館友ト通常館友ノ二種ニ分ツ。
創立発起人並ニ特別ノ援助ヲ与フル者ヲ維持館友トナス。
年額金二円以上ヲ五年間醸出スル者ヲ通常館友トナス。

第六条 本館ニ左ノ役員及ビ職員ヲ置ク。

理 事	七名	評議員	若干名
学芸委員	若干名	館 員	若干名

第七条 理事及び評議員ハ本館経営ノ衡ニ当ル。

学芸委員ハ資料ノ蒐集考案等ノ事ニ従フ。

館員ハ本館ノ実務ニ従事ス。

第八条 評議員ハ維持館友ノ互選ニヨリ、理事ハ評議員ノ互選ニヨリテ之ヲ定メ、各其ノ任期ヲ二年トス。但シ再選ヲ妨ゲズ。

理事中ニ於テ理事長一名、司計二名ヲ互選ス。

学芸委員ハ理事会ニ於テ之ヲ依嘱ス。

館員ハ理事長之ヲ選任ス。

第九条 維持館友總會ハ毎年一回三月ニ之ヲ開ク。

評議員会ハ毎年三月ニ定期会ヲ開キ、必要ニ応ジテ臨時会ヲ開ク。

第十条 理事及び評議員ハ無給トス。

館員ハ有給トナスコトヲ得。

第十一条 本則変更ノ場合ハ維持館友總會ニ於テ出席者半数以上ノ同意ヲ要ス。

附 則

第一条 本館ノ報告ハ中外日報紙上ニ掲載ス。

第二条 本館ノ陳列所ヲ当分京都市東山京都女子高等専門学校内ニ置ク。

第三条 本館ノ事務所ヲ当分京都七条猪熊龍谷大学図書館内ニ置ク。

その名に「仏教」を冠し、仏教家であった中井が中心となって、仏教教育を主たる目的として設立されたが、児童作品の展示や外国との教育資料の交換も事業としてあげられており、事業内容を仏教にかぎっていたわけではないことがわかる。

中井からシャーウッドへ、この設立の報告は早々に届いていたようで、4月29日付の『中外日報』には、早くもボストンのチルドレンズ・ミュージアムの館長からの祝辞が掲載されている(中外日報 65)。そこでは、小規模であっても続けていくことに価値があることや、姉妹博物館として援助をおしまないことが伝えられている。子どものための博物館経営においてすでに運営が軌道にのっていたボストンの博物館とこうしたやりとりを行っていたことが、中井をはじめとする設立メンバーにとっての大きなはげみとなっていたのではないだろうか。

こうして設立に至った仏教児童博物館であるが、建物はなく、はじめの3年半の間は龍谷大学図書館に事務をおき、知恩院、大丸百貨店、京都女子専門学校など他の施設を借りて展覧事業をおこなっていた。設立の翌年、京都市円山公園にあった建物の使用を申請し、1931(昭和6)年7月15日にそこを引き渡された(中外日報 111)。当初1ヶ月程度で中を整備して開館することを予定していたが、実際の開館は10月4日となった(中外日報 116)。

6. シャーウッドからの米国博物館情報

館長の中井と、ボストンに住むシャーウッドは、生涯一度も会うことがなかったが、書簡のやりとり重ね、多くの情報を伝えあっていた。シャーウッドから中井へ送られる手紙には、ボスト

ンをはじめとしたチルドレンズ・ミュージアムに関することも多かった。先にあげたさまざまな論説の中でのアメリカ博物館事情の紹介は、すべてシャーウッドからの書簡を通じてもたらされたものである。仏教児童博物館は、米国の博物館情報を入手し、自らの博物館経営にそれらの情報をとりいれていた。シャーウッドからの博物館に関する情報は、中井を中心とした仏教児童博物館の経営にかかわる人達だけでなく、『中外日報』や『親鸞主義』を通じて、一般の人々にも紹介されていた。

『中外日報』では、シャーウッドからの書簡を訳した「児童博物館」という記事が、1928年1月21日から2月9日の間に、8回にわたり連載された（中外日報41、42、43、44、45、46、48、49）。ちょうど、仏教児童博物館が設立にむかって歩みはじめた頃である。他にも、米国で博物館の経営にあっていたチャールス・ドーグラスという人物の講演内容の紹介などもみられる（中外日報52、53、54）。また、『仏教児童博物館設立趣意書並館則』にも、附としてシャーウッドによる「児童博物館の話」をつけている。これらを通して紹介された内容を整理してみると、①子どものための博物館のなりたち、②子どものための博物館の資金、③子どものための博物館の事業、④博物館のあり方、の4つの事項に分類できる。その概要は次の通り。

①子どものための博物館のなりたち⁽¹⁴⁾

子どものための博物館設立は新しい事業であり、米国で最初にできたのはニューヨークのブルックリンであることが紹介されている。それに次いで設立されたのがボストンのチルドレンズ・ミュージアムであり、1913（大正2）年のことだった。シャーウッドからの手紙が書かれたのは、ボストンの設立から15年後にあたるのだが、そのときすでに米国内には、多くの大都市で同種ものが建設されていたし、設立運動が絶えずおこなわれていたと記されている。

ボストンのチルドレンズ・ミュージアムについては、くわしい沿革が紹介されている。小学校教師と婦人教育会と市の公園課の共同でつくられ、最初は資金もほとんどなく、2つの展示棚の数の鳥の標本と1籠の鉱石しかなかったという。しかし、そのような状態からでも開設したことで、次第に周囲の理解を得て拡大していったと述べられている。

②子どものための博物館の資金

ボストンのチルドレンズ・ミュージアムの財源は、「館友」と呼ばれる人々からの寄付にあった。館友には、保護会員、終身会員、協同会員、維持会員、正会員、少年会員の6つの種類があって、それぞれによって寄付金額がことなっていた。

館友だけでなく、ひろく市民にも訴えかけて寄付金を募っていた。寄付を募る文書には「一時の困窮を救ふための一弗は、一弗だけの価値を出すのみであるが、児童の為に放資される一弗は、種子を蒔くやうなもので、百倍の収穫となつて報みられる」と、子どものための事業にたいする投資が大きな意味を持つことを説いていた。

③子どものための博物館の事業

ボストンのチルドレンズ・ミュージアムにおける展示品のほとんどは、寄贈か借用によるもので、近隣の博物館や博物学会の援助を得て、収集を行っていた。展示は、12歳児が見やすい高さ

にしつらえられ、解説も子ども向けになるよう考慮されていた。「少年来館者は室内を歩き廻つて動物を見、札を読み、互いに語り合ひ、質問があれば其辺に居る館員に尋ねるので、誰しも之が公共の機関であるといふ印象を受けなくて、児童に属する倶楽部のやうな感を受ける。即ちそこには自由に出入りが出来、謹慎な行儀を要せず、唯他人の学習を妨げぬだけの礼儀を守ればよく、且館員の誰かが質問に答へ批評を聞かうとしてゐる」と紹介されたように、子ども達が自由に語り合ひ、学び合う環境が用意されていた。

また、小学校と打ち合わせをして、クラスごとに博物館を訪問してもらい、話と展示見学をあわせた授業を博物館で行っていた。これに申し込むのは、市内の市立小学校だけでなく、私立学校や他都市からの参加もあった。例えば、1915（大正4）年で350クラス、1921（大正10）年で512クラス、1921（大正26）年で1054クラスもの来館があったと紹介されている。

このほかの特徴的な事業としては、子ども達の自主運営によるクラブ活動があげられている。子ども達から自発的に作られたいくつかのグループごとに、博物館スタッフの協力のもと、自然観察やモノの蒐集、発表会などを行っていた。クラブ活動に関連して「アワー・ホビー」という機関誌も出しており、この発行も子ども達の自主によって運営されていた。また、子ども自らが自分の展示コーナーを持つことができたり、ボーイスカウトのメンバーによる展示解説案内を行ったりと、子どもら自身も博物館事業の担い手となっていたようだ。

④博物館のあり方

前掲のチャーレス・ドーグラスによる「児童の為の博物館」は、彼の講演内容を紹介したものである。この講演では、博物館がいかになすべきかが述べられた。まず、子どものための博物館にかぎらず、博物館とは教育機関であり、そこでなにながなされたかが重要であると説かれた。「近代博物館は一方には僅かばかりの専門家と他の一方にはあてもなく時間つぶしにぶらぶらする怠け者を迎えて陳列品を見せる様なものでは勿論無い」とし、「博物館は何にも教育的な仕事をしない白い墓の様なものではないと思つてゐる……だがもし博物館の価や効用で区別するとなれば、その建物の形や陳列品の値やは第二の問題で第一に置かねばならぬ重要な点はその教育的生産力である……どれほど知的好奇心を惹起し満足せしめたか、その活動の結果として館所在の市民間にどれほどの告示に熱中する者があるか、本来の目的が教育にあつて最も有効な方法に依つて教へることが客観的な目的である」。続いて、「児童が群り集まつて熱心に又歓喜してゐるのは展観のためではない。否彼等は岩石や鳥や植物なら野外で自由に見ることができる。児童が博物館にひきつけられるのは博物館では是らの物に含まれた意味と自然現象とを理解するからである」と、子どもが博物館で得るものがなにかを指摘した。そして、「博物館と冷たい蔵との違いもその教育的生産高にある」と述べ、博物館が展示のためだけにある場所ではなく、教育を行うことがその存在目的であると説いた。

7. 仏教児童博物館の経営

仏教児童博物館は、博物館の有効性は実物による教育にあると説き、「我が国最初の児童博物館」

として学校教育を補うのが務めであるとした。そして、子どものみならず「成人教育や社会教育」にも役立つとアピールして「館友」をつのつた。また、その名が表すように、仏教にも重きをおいていた。こうした考えにもとづき行われていた事業は、どのようなものだったのだろうか。仏教児童博物館では、開館から最初の5年間に『仏教児童博物館年報』を発行していた。それ以外にも、雑誌『親鸞主義』、『コドモ新聞』などで事業報告をおこなっている。ここでは、『仏教児童博物館年報』をてがかりに、仏教児童博物館で実施されていた事項を整理してみる⁽¹⁵⁾。

① 展覧会と資料の貸し出し

仏教児童博物館は、主として寄贈により資料を得ていた。最初の3年は展示のための建物を所有していなかったため、貸出と巡回展によって公開していた。貸出先は、京都市内および他地域の小学校、女学校、日曜学校などであった。貸出は往復の運送代を借り手に負担してもらい、出張費も出せば館員がつきそって各貸出先を訪問していた。巡回展も、京都やその近郊地域にとどまらず日本各地で開かれていた。例えば、1930（明治5）年の展覧会の先は、〈表3〉のとおりである。

〈表3〉 仏教児童博物館の巡回展（1930年3月～1931年2月）

開催年月	開催地	日数
1930・5-3	京都市岡崎公園宗教大博覧会第二宗教館	60
1930・5	京都市竜谷大学宗祖降誕会	
1930・5	神戸市須磨太子館	
1930・7	京都市龍谷大学教室	2
1930・7	福井県今立郡片上村安楽寺	5
1930・7	福井県今立郡北中山村小学校	
1930・8	兵庫県揖保郡網干町小学校	
1930・8	兵庫県揖保郡大津村小学校	2
1930・8	兵庫県須磨郡津田村小学校	2
1930・8	大阪市柴島町萬福寺	2
1930・8	和歌山市鷺森本願寺別院	9
1930・9	北海道東倶知安村廣徳寺	
1930・10	北海道東倶知安町東林寺日曜学校	2
1930・10	秋田市山口銀行支店楼上	3
1930・10	滋賀県阪田郡南郷里村小学校	2
1930・10-11	兵庫県芦屋仏教開館	5
1930・11	京都市東山華頂高等女学校	2
1930・11	神戸市生田町東極楽寺明照日曜学校	2
1931・1	京都府乙訓郡神川小学校	2
1931・2	京都市西院小学校	3
1931・2	京都市北野作福学園	
1931・2	京都市西大谷龍谷日曜学校	

『仏教児童博物館第三年報』により筆者が作成

1931（昭和6）年に入って建物を有するようになり、その翌年からは特別展覧会も開催されるようになった。例えば、1932（昭和7）年3月から昭和8年2月には、鎌倉仏教展覧会、世界文字展覧会、聾啞学校生徒成績品展覧会、浄土宗祖降誕記念児童作品展覧会、瓜哇古代面展覧会、米国児童寄贈品「米国祝祭日」「人の一生」展覧会、日本郷土玩具展覧会と、7つの特別展覧会が開催された。

このように仏教児童博物館は、学校などの団体への資料の貸し出しと地域での展覧会事業からはじまり、建物を持つようになってからはそれら2つに加えて常設の展示と特別展覧会をもって資料の公開に努めた。

②教育事業

仏教児童博物館は、展覧会以外にも種々の教育事業を行っていた。

・土曜お話の会

仏教児童博物館では、来館者にたいしては、通常から館員が案内や説明を行っていた。それとは別に、特に子どもにむけて資料を用いた「お話の会」を毎週土曜日の午後2時から開いていた。各回の参加者平均数は、77名であったという。

・ミュージアム・ゲーム

仏教児童博物館では、ミュージアム・ゲームという上下級2種の説問のプリントを来館者に用意していた。「正確なる観察を訓練し且つ資料の説明を十分に理解せしむる方法」として行われていた。成績優秀者には、賞品も用意されていた。

・児童文庫

子どもむけの読み物や、展示資料に関する参考図書を実物研究のために用意していた。中には、学校の帰りに仏教児童博物館に立ち寄って勉強する児童もあったという。

・趣味の会

仏教児童博物館の来館者で、趣味を同じくする子ども達が自主的に運営していた集まりである。ボストン・チルドレンズ・ミュージアムの「クラブ」に相当するものと考えられる。1932（昭和7）年には〈表4〉にあげた5つの会が活動を行っていた。

〈表4〉 仏教児童博物館「趣味の会」

会の種類	活動日	活動内容
図書会	隔週日曜日	実物写生、模写、指導者からのお話
唱歌の会	第一、第三土曜日	歌の練習
ボーイ・スカウトの会	第二、第四土曜夕	集会
手工の会	毎週土曜日	3つのグループにわかれて共同制作
園芸の会	毎週土曜日	庭園に花壇をつくり草花を栽培

『仏教児童博物館第五年度年報』により筆者が作成

③海外との交流

設立のきっかけが米国との人形交換にあるように、先にあげた多岐にわたる事業に加えて、仏教児童博物館の特徴的な活動として、諸外国との交流がある。設立のための発起人集会でまとめられた趣旨にも「国際的親善」がうたわれている。その相手に米国だけでなく、中国をはじめとするアジア地域やヨーロッパ諸国もみられた。設立からの5年間になされた主な物の交換は、(表5)のとおりである。表のように、ここで交換されたのは、ほとんどすべてが子どもの作品であった。現在も残されている収蔵資料の中には、外国の子どもが自国を紹介するために作ったと思われるスクラップブックが含まれている。ただ情報として作品を送り合うというだけでなく、子どもらが国際親善の担い手となるべく、「送るモノ」すなわち「贈り物」を作っていたのだろう。これらの作品づくりについて、博物館がどのような支援を行っていたのかについては、博物館活動の詳細を知るためにも今後調査を継続する必要があるだろう。

〈表5〉 仏教児童博物館における海外との資料交換（1928-1930）

交流先（機関もしくは都市名）	所在国	送ったもの	送られたもの
ロスアンジェルス博物館少年部	米国	京都の幼稚園、小学校、	スクラップブック
プロビデンス・チルドレンズ・ミュージアム	米国	中学校、女学校より	
ボストン・チルドレンズ・ミュージアム	米国	絵画作品	
シカゴ美術学校少年組	米国	スクラップブック	絵画作品
ニューアーク博物館	米国	スクラップブック、五月人形	スクラップブック
天津	中国	児童作品	児童作品
上海	中国		教科書、絵本、雑誌
	印度	絵画作品	
ライブチヒ	独逸	神戸の小学校、女学校より	図画 140 枚
イエナ市カロロ・アレキサンドリヌム中学校	独逸	作品 30 点	切り絵細工 30 枚
	チェコスロバキア	京都、神戸より図画 53 点	
文部大臣	シヤム	日曜学校生徒の宗教画 35 枚	

『仏教児童博物館年報』により筆者が作成

所在国名の表記は史料にしたがった。

年報によればスクラップブックとは「風習週習慣を紹介する諸種の絵画を新聞雑誌から切抜いて是を系統的に貼付けたるもの」。

8. むすび

日本において、子どものための博物館は、物を介した心と文化の交流をめざすことから始まった。その背景には、「国際親善は子どもから」というシャーウッドの思いと、市民の心をも動かす中井の実行力があつた。博物館設立の契機となった人形交換は、日米両国においてたいへん興味を引いて全国に巡回され互いの文化への理解と交流に役立ち、ギャーリックにも影響を与えていた。日本から送られた雛人形はボストンのチルドレンズ・ミュージアムに保存され、これをきっかけに博物館の間で交流がなされた。中井（1932）も「その範をボストンの児童博物館に取っ

た」と言い、仏教児童博物館の活動内容にボストンの影響は強く出ていた。仏教児童博物館は、日本で最初に設立された子どもの博物館であるだけでなく、博物館としていくつもの興味深い特徴を持っていた。

仏教児童博物館が保持していた機能について特筆すべきことは、人と人とのむすびつきのための場として生きていた点である。仏教児童博物館における展示資料は、その物としての価値や情報を越えて、心と心を通わせるためのインターフェイスとして存在していた。まず、設立の契機がアメリカの親日家の発案による人形交換事業にあり、交換された人形は日米それぞれの文化を凝縮したひとつの形で、同時に双方の想いを載せる媒介物でもあった。また、博物館という場が、展覧場であるだけでなく、子ども達の交流の場として機能していた。このように、モノを媒介にした国際交流と趣味のクラブをはじめとする人と人とが共に集い共に学びあう仲間になるという二つの交流の拠点として機能していたことはたいへん興味深い。

仏教児童博物館は、中井の死後、中井と共に運営にあたってきた日野大心（1908-2005）がその経営を引き継いだ。後に日野が園長を務める円山幼稚園、松尾幼稚園の附属施設となり、次第に規模や経営内容が縮小されていった。やがて日野の手を離れ、今では財団法人仏教児童博物館の名のもとに資料を保管するのみで、博物館施設は保持されていない。

川北（1997）も指摘するように、個人にゆだねられた経営のあり方は、困難なものだった。十分な財源をもたず、中井の人脈と館友からの寄付や日野の個人的努力のみに頼る経営が、ひとつの博物館を支えるにはあまりにも心もとないものであったことは想像に難くない。そのため、仏教児童博物館のように小規模ではあっても地道な活動を続け利用者に支持される博物館が正当に評価され、支援される文化の仕組みづくりが必要となってくるだろう。

明治末ごろから見られるようになった子ども博覧会⁽¹⁶⁾や、学校博物館⁽¹⁷⁾など、子どもを対象とした娯楽や教育のための展覧事業は、このころにはすでに広く認知されており、その楽しさや教育的有用性が利用者に実感されていたことは予想される。また、子どものための博物館については、『博物館研究』においてたびたび記事が掲載されていた。「ボストンにある児童博物館の活きたはたらきの如きは、実に羨望に堪へない」とアメリカの例が紹介されたり、棚橋源太郎の論考が登場することもあった（棚橋 1930）⁽¹⁸⁾。『博物館研究』には仏教児童博物館を紹介する中井の論考も3編掲載されており、その取り組みは、専門家の間でも注目されていたにちがいない。加えて、仏教児童博物館は、その初期において活発な活動を行い、地域に根ざした経営を行う博物館として存在してきた。児童文化や児童文学の領域で業績を残した上原弘毅や東光敬（1911-1945）、花岡大学（1909-1988）も運営にかかわっており、中川正文（1921-）は住み込みで文庫や児童劇団にまで手を広げたと言い、当時の博物館活動の活発さがうかがわれる（中川 1995）。仏教児童博物館は、博物館の専門家から注目され、地域から親しまれる博物館であったのだろう。このころの事業内容や運営の詳細を明らかにすること、日本における子ども向け展覧施設の変遷の中に仏教児童博物館を位置づけることを次ぎなる課題としたい。

〈謝辞〉

仏教児童博物館の調査に際して、日野大心先生、正福寺ご住職ご夫妻、水田禎史氏にはたいへんお世話になりました。ここに記して御礼申し上げます。日野先生は、当時の事業についてたくさんのお話をおきかせくださり、貴重な資料もお貸しく下さいました。本稿をまとめる前に鬼籍に入れ、読んでいただくことができなくなってしまったことが悔やまれてなりません。ご冥福をお祈りします。

注

- (1) 「ハンズ・オン」の解釈については、山本哲也（2002）に詳しい。
- (2) 是澤博昭による研究論文（「渋沢栄一・国民外交の行方—日本における『国際児童親善会』への認識とその後の展開』『渋沢研究』6号1993年等）のほか、一般図書としては磯部佑一郎『青い目の小さな大使』ジャパントイムズ1980、武田英子『青い目をしたお人形は』太平出版社1981、『青い眼の人形』山口書店1985などがある。
- (3) シャーウッドの親日活動については以下の資料を参照した。中井玄道『仏教児童博物館設立趣意書並館則』、南村生（1925）、『中外日報』7798、7818号
- (4) 『中外日報』と『親鸞主義』の記事については、関連記事一覧〈表1〉〈表2〉を作成しその番号で引用文献を示している。
- (5) 中井玄道の履歴については、『教行信証』にある「中井玄道略歴」による。
- (6) シャーウッド自身が著した論説は、「世界平和に関する日本仏教徒への檄文」『親鸞主義』27号、「日米両国民の精神的結合を論ずる書」『親鸞主義』53号。シャーウッドを紹介する記事は、南村生「ポスト日本協会の超宗派的日米親善運動」『親鸞主義』45号。
- (7) シャーウッドからの手紙は日本語に訳されてたびたび『中外日報』や『親鸞主義』に掲載された。
- (8) 845円50銭の寄付金の使用内訳は、雛人形代と荷造り費が499円30銭、運賃と保険手数料が49円32銭、シャーウッドへの送金が294円26銭、書留郵便為替料が2円62銭であった。
- (9) 人形は京都麩屋町通四条北入の奥山彌三郎によって製作されたと記されている。
- (10) 『中外日報』に掲載されたのと同じの書簡が『親鸞主義』にも一部所収されている。
- (11) 百貨店の名称 Jordan Marsh のカタカナ表記については、それぞれの記事に掲載されているまま。
- (12) 展覧会開催の広告は『中外日報』に3回掲載されている。8783、8785、8786号。
- (13) 表紙には『仏教児童博物館設立趣意書並館則』とある。B6サイズで全34ページからなる小冊子。仏教児童博物館事務所編。内容から、1928年4月～1929年3月の間に作成されたと考えられる。
- (14) ①子どものための博物館のなりたち、②子どものための博物館の資金調達法、③子どものための博物館の事業については、『仏教児童博物館設立趣意書並館則』の中の「児童博物館の話」を参照した。
- (15) 『仏教児童博物館第一年報』1928年3月～1929年2月。『仏教児童博物館第三年報』1930年3月～1931年2月。『仏教児童博物館第四・五年報』1931年3月～1933年2月。本項の内容は、全てこの年報を参照した。
- (16) 児童博覧会、こども博覧会に関する研究には、是澤優子1995「明治期における児童博覧会について(1)」『東京家政大学研究紀要』35集、是澤優子1997「明治期における児童博覧会について(2)」『東京家政大学研究紀要』37集、川口仁志1999「教育学術研究会の『子ども博覧会』についての考察」『九州造形短期大学紀要』21巻、川口仁志2000「明治末の地方における子ども博

覧会について』『九州造形短期大学紀要』22 巻、川口仁志 2006『『皇孫御誕生こども博覧会』についての考察』『松山大学論集』17 巻 6 号などがある。

- (17) 例えば、東京女子校等師範学校附属小学校では、1919(大正 8)年に児童博物室が設置されている。1936(昭和 11)年には、児童博物館と名称があらためられており、展示物として、標本や模型、掛図、児童製作物などがあげられている。
- (18) 『博物館研究』では、チルドレンズ・ミュージアムは「児童博物館」と訳され、たびたび記事が掲載された。たとえば、Vol. No. (1928 年) Vol. No.4 にはデトロイト、Vol. No.5 (1928 年)にはブルックリン、Vol.2 No.1 (1929 年) Vo3. No.3 (1930 年)にはロンドンの記事がある。

引用・参考文献

仏教児童博物館事務所編『仏教児童博物館設立趣意書並館則』

『仏教児童博物館第一年報』1928 年 3 月～1929 年 2 月

『仏教児童博物館第三年報』1930 年 3 月～1931 年 2 月

『仏教児童博物館第四・五年報』1931 年 3 月～1933 年 2 月

川北典子 1997『『財団法人仏教児童博物館』の研究-その設立と活動について-』『子ども社会研究』3号、pp3-15

中井玄道 1943「児童博物館の施設概況」『博物館研究』vol.5 No.8、pp5-6

中井玄道 1932「博物館の新展望 -京都仏教児童博物館の概況」『博物館研究』vol.11 No.8、pp4-5

中井玄道 1941「児童博物館の使命と経営」『博物館研究』vol.14 No.5、pp5-7

中井玄道校訂 1982『教行信証』復刻版

中川正文 1995「京都の児童文化 -先人に学ばねばならない数々」『京都新聞』1995 年 9 月 26 日、p19

奥田環 2006「学校博物館の源流 -東京女子高等師範学校付属小学校の『児童博物館』-」『博物館学雑誌』31 巻 2 号、pp19-36

佐藤優香 2001「J.M.シャーウッドと中井玄道による日米親善人形交換事業」『甲南女子大学大学院教育学論集』19 号、pp23-41

棚橋源太郎 1930「児童博物館問題」『博物館研究』Vol.3, No.4、pp4-10

柘植千夏 1997「『子どもの博物館』の萌芽-児童博覧会の開催から児童博物館の開設まで-」『博物館史研究』No.5、pp1-4

山本哲也 2002「ハンズ・オンの解釈をめぐって」『博物館学雑誌』第 27 巻第 2 号、19-27

The Young East, Vol.11, April, 1927 “Real Sponsor of American Doll Mission”, pp390-391

『親鸞主義』と『中外日報』については〈表 1〉〈表 2〉を参照